

土器製作技術からみた東北アジア稲作伝播期における文化変化の研究

三阪, 一徳

<https://hdl.handle.net/2324/1654592>

出版情報：九州大学, 2015, 博士（文学）, 課程博士
バージョン：
権利関係：やむを得ない事由により本文ファイル非公開（3）

論文題目 土器製作技術からみた東北アジア

稲作伝播期における文化変化の研究

氏名 三阪 一徳

論文内容の要旨

土器製作技術からみた東北アジア稲作伝播期における文化変化の研究

本論では、土器を素材に、先史時代の東北アジアにおいて稲作が伝播する時期に生じた、社会集団の接触とそれに伴う文化変化について検討を行った。これまでの土器研究において、主な分析対象であった形態的な側面だけではなく、その製作技術に焦点をあてたことが本論の特色である。なぜなら、完成品としての土器を見ただけでは、製作技術を模倣することは難しいため、これまでの伝統に系譜を追うことができない技術要素が出現した場合は、異なる文化あるいは技術体系をもつ社会集団との接触を読み取ることができるからである。また、本論では、土器の形態および製作技術における在来要素と外来要素を識別し、これをもとに、外部の文化との接触によって生じた、在来文化の変化過程を明らかにすることを目的とする。

第1章では、東北アジアにおける稲作伝播期の文化変化および土器研究についての学史を整理し、本論で解決すべき課題を提示した。そして、その解決のための資料と分析方法および、土器製作技術の観察視点と分類方法を示した。

第2章では、土器の分析をもとに、北部九州における弥生時代開始過程について検討した。その結果、朝鮮半島南部（現在の韓国の範囲をさす）からもたらされた文化要素は、縄文時代晩期の黒川式期には散発的に認められるが、土器の器種組成や製作技術にまで影響を及ぼすのは夜臼I式期であることを確認した。そして、このとき、土器の形態・製作技術において、在来要素と朝鮮半島南部に由来する外来要素は明瞭に分かれるわけではなく、両者が混在・変容・融合する現象が少なからず確認された。そのため、土器にあらわれた差異が、直接的に移住者や在来者、あるいはこれに関連する社会集団を示しうるという学説について否定的な結果をえた。また、朝鮮半島南部に由来する土器の諸要素は玄界灘沿岸一帯にみられるが、唐津平野と糸島平野で相対的に多くみられた。この分析結果は、朝鮮半島南部からの移住の中心地が、唐津平野と糸島平野であったという学説と矛盾しないものであった。ただし、在来者・移住者・混血者の構成比、彼らの共住のあり方によって生じた、同時期の地域差を示す可能性も残される点を指摘した。

第3章では、土器の分析をもとに、朝鮮半島南部における青銅器時代開始過程について検討した。青銅器時代早期になると、前時期の新石器時代晩期には系譜をもとめることができない外来

要素が認められた。この分析結果は、他地域から稲作とこれに伴う文化要素がもたらされたという学説を支持するものであった。さらに、土器製作技術にまで外来要素が及んでいる点から、社会集団の移住を伴っていた可能性を示唆するものである。また、土器の形態・製作技術において、在来要素と外来要素が混在する状況は、今のところ青銅器時代開始期でも京畿地域の刻目突帯文土器にのみしか確認されず、他地域の刻目突帯文土器や二重口縁土器には認められないことを明らかにした。そのため、当該期の二重口縁土器を新石器時代晩期以来の在地要素と捉える説は成り立ち難いことを指摘した。

第4章では、これまであまり注目されてこなかった、遼東半島における新石器時代から青銅器時代の土器製作技術の変化過程について分析を実施した。その結果、朝鮮半島南部の青銅器時代と一定の共通性をもつ土器製作技術が、これに遡る遼東半島の偏堡類型に確認された。両者は時間・空間的な距離を有するため、無関係である可能性も残された。一方、その関係性を積極的に評価した場合、朝鮮半島南部の青銅時代開始期に出現した土器製作技術は、遼東半島を起点に、時間の経過に従い、朝鮮半島北部（現在の北朝鮮の範囲をさす）、さらには同南部へと拡散したという仮説が立てられる。これは、当該期の文化要素が西北部地域を経由して朝鮮半島南部にもたらされたという学説に整合的である。ただし、遼東半島と朝鮮半島南部の間に位置する朝鮮半島北部の土器の分析は困難であったため、今後間を埋めていく作業が課題として残された。

第5章では、北部九州・朝鮮半島南部・遼東半島の稲作受容期において、土器製作技術が変化した要因について検討した。北部九州と朝鮮半島南部では、イネの出現あるいはその栽培の開始に伴い、覆い型野焼きと木製板工具調整が出現する。前者は土器焼成への稲藁の利用、後者は木製農具製作に伴った板材加工技術の変化と連動している可能性が高い点を指摘した。

第6章では、前章までにえられた土器の分析結果と議論を整理し、東北アジアの稲作伝播期において、北部九州と朝鮮半島南部で生じた文化変化の特質について検討した。両地域の文化変化は、東北アジア一帯に生じた稲作伝播の過程で、周辺地域から、おそらく社会集団の移動を伴って、新たな文化要素がもたらされたことが契機となる点が共通する。一方、以下の相違点もみられる。朝鮮半島南部では、新石器時代にすでにアワ・キビ栽培が開始されていたなかに、青銅器時代早期にイネが加わり、その後、農工具が拡充されつつ、後期になると確実に灌漑農耕が行われることになる。これに対し、日本列島では夜臼Ⅰ式期において、狩猟採集を生業とする社会のなかに、灌漑農耕によるイネ（おそらくアワ・キビを含む）の栽培が一斉にもたらされたという相違点がみられる。

次に、文化要素の変化過程をみた場合、稲作が受容される直前段階、つまり、北部九州では縄文時代晩期の黒川式期、朝鮮半島南部では新石器時代晩期において、在来要素のなかに散発的に外来の文化要素が看取され、一定の情報の蓄積が開始されていた点が共通する。次の稲作を伴った外来の文化要素が体系的に受容され表出する段階、北部九州では夜臼Ⅰ式期、朝鮮半島南部では青銅器時代早期になると、在来要素と外来要素が併存しつつ、変容・融合しながら新たな文化要素が創出されていく現象が共通してみられた。その後、農耕の本格化に伴い、さらに在来要素と外来要素の融合・変容が進行し、さらには在地化した新たな文化要素へと収斂していく。こういった状況は、北部九州では板付Ⅰ式期後半あるいは遠賀川式土器の時期にあたる。これと類似した状況は、朝鮮半島南部では青銅器時代早期の刻目突帯文土器に相当する可能性があり、土器の器種組成や製作技術に多く共通性がみられる。ただし、北部九州の板付Ⅰ式期後半には、灌漑施設を伴う農耕が本格化するのに対し、朝鮮半島南部の青銅器時代早期には、灌漑農耕の痕跡は現状の資料では確認されず、これが確実に認められるのは青銅器時代後期である点で異なっていた。